

人生における意味の探求

——仏教と福祉と教育の基礎にあるもの——

宮 脇 陽 三
(佛敎大学教授)

一 はじめに

今日、東洋と西洋の偉大な宗教的伝統についての深い再認識の運動が起ってきている。仏教を含めて、これらの宗教の教えの中には、健康な身体、健全な精神、創造の喜び、あらゆる信仰と人種と文化の間での相互理解と寛容と愛を涵養する人間性と宇宙の森羅万象についての基本的かつ統合的な真理が含まれているのである。

このような認識は、現代の西欧社会において支配的である合理主義や唯物主義の見方や考え方の行き詰まりを打開するものとして、最近、とくに注目されてきているのである。わたしたちも、このような視点から、今日の学校での

宗教教育や道德教育を見なおす必要があるし、またそのことによって、あらゆる信仰の基礎となりうるような、これらの宗教的価値に対して児童生徒を育成することができるようになるのである。

二 学校道德教育の役割

今日の学校での道德教育は、学校の教育活動の全体を通じて行われるものとされているが、さらにそれらを補充し深化し統合するために、とくに「道德」の時間が設けられている。しかし今日の道德問題は、たんに学校というわくの中だけでなく、家庭、地域社会、機能社会の全体にわたって密接不可分な関連をもって、大規模な展開をみせてい

るのである。

急激な科学技術の発展にともなう社会生活の変化、既存体制の權威に挑戦する青年たちの反抗、伝統的な価値体系の崩壊など、社会全体のこれまでのあり方の再検討が迫られているのである。

多くの学校では、教師は青少年の無氣力、無関心、無責任、無秩序に手を焼いている。学校の外では、白昼から暴走族がけたたましい騒音と猛速と興奮と戦慄の刹那的な感覺の陶酔に沈倫しつつある。自動車という高度な文明の利器と、他人の迷惑をまったく頓着しないという野蠻性との、この奇妙な同居は現代物質文明のもたらした混乱と不安の一つの産物であるといつてよいであらう。

今日、すでに同年令人口の九割台の者が、高校へ進学するといふ情勢のもとでは、学校は児童生徒をして責任ある成人の資質へまで育成していくという重大な役割を演じなければならなくなっているのである。それゆえ、学校は児童生徒をして、かれらと地域社会との關係に關心を持たせたり、人生の意味と目的を洞察させる価値の発見へと助成していく必要があるのである。

三 道德教育の内容

人生における意味と目的は何であるかということは、仏教を含めて宗教の究極的な課題であり、宗教的瞑想の核心ともいえるのである。しかし、多くの児童生徒は、このような宗教的な伝統や權威によって伝承されてきた信仰を、身近かに親しめるようにはなっていないのである。それゆえ、かれらは自分自身で、これらの意味を発見していかなければならないのである。学校教師は、かれらが自分自身で人生の意味を発見できるように、かれらの生活経験領域を整備しておく必要がある。これらの生活経験領域は、つぎに示すような六領域を含むのである。

(一) 自我同一性——自分は何者であるのか——

成人期に入りかけている青年にとって、人格的な自我同一性アイデンティティを発見することは、重大な基本的問題である。これは精神の形成にとって本質的に不可欠なものである。どのようにすれば、青年は自己自身の、真実の自我の発見を助成するような経験を自覚するようになるのか。

これは、人生の真実を求めて、教師と生徒の、両者の精

神の火花が相互に散る中で創造されていくものである。なぜなら、内面的生活の意味は、そのような生きた精神の相互作用の中ですか、明らかにってこないからである。

今世紀におけるフロイドなどの深層心理学の発見は、宗教的冥想における靈感というものは、われわれの積極的な働きかけよりは、むしろわれわれの無意識を利用しているということを示したものである。本当の靈感というのは、一所懸命になって問題を解こうとしている時よりも、むしろ心を虚心にして静めている時に、心のうちから湧き出るような感じで浮かぶものなのである。

世界の宗教的な天才が身をもって証しとした宗教的英知は、現代における生活経験を偉大な宗教的洞察に照らして関連づけることによって、道德教育の方向を示す道標となるのである。偉大な宗教的天才の精神的経験は、内面の風光、回心などの言葉によって、比喩などの象徴的形式によって表現されている。ともあれ、現代の青少年にとって、このような内面的な真理の発見のためには、道元の「何もしないで坐れ」ということが重要である。何も言わずに、沈黙して考える。それを何年かやると、自ずと「自分はい

いたい何者であるか」について、自分なりに納得しうるものが掴めてくるのではなからうか。

(二) 社会——隣人は何者であるのか——

「秋深し 隣は何をする人ぞ」の問いかけは、家族、近隣社会、学校、国家、世界のいずれにせよ、さまざまな人間関係についての意味を説明するきっかけとなるのである。現代の社会や世界は、さまざまなイデオロギー、人種、民族、信仰などによる偏見にもとづいた対立や葛藤の渦の中に巻きこまれ、混沌とした状態にある。

人びとはそれらの対立関係の中で、中立の立場をとることとは、実際にはほとんどできないのである。およそ知的認識の世界では、経営者と労働者、生産者と消費者、生と死、愛と憎など、すべての事象を合理的に分類して系統立てることになるが、そのような認識の仕方は、必然的に対立とか矛盾の関係をひき立たせることになりやすいのである。それゆえ、人間社会の全体的な統合を維持し発展させるためには、知的認識の次元を越えた、例えば神の恩寵とか仏の慈悲のもとでの万民の救済というような、万人にとって本質的価値であるような宗教的認識の次元へ、児童生徒を

開眼させることが必要なのである。

そのためには、さまざまな文化や信仰やイデオロギーの相違を越えて、人間の存在理由となっているものを、直接的な人間の出合いを通じて、児童生徒に自覚させていくことが、ますます必要となってきたのである。とりわけ、どのような偏見が児童生徒を取り巻いているのかを探究させ、そこから脱却させることが必要である。

したがって児童生徒に対しては、特定の社会階級や社会集団の利害関係を離れた、全体としての社会奉仕活動の機会を、できるだけ多く設定するようにしなければならない。それは、かれらに社会の一員としての自覚と責任を与えることになるのである。

(三) 自由——自分は自由であるか——

人生の意味の発見の核心は、人間の自由の本質は何かという問題である。自由の本質は、わたしたちの肉體的な、また神的な本質の主要な要素であるということを、わたくしたちが発見した時にのみ、わたくしたちは自分たちを支配し奴隷化する力に打ち勝つことが期待できるのである。

しからば、どのようにして現代の児童生徒の生活経験を、

そのような人格的自由の探究に結びつけることができるのか。どのようにして、わたくしたちは自分自身の責任にもとづく選択能力が、真実の存在理由の一部であることを自覚できるようになるのか。

現代の児童生徒は、マスコミによる大衆意見操作、また暴力行為の是認を暗示する不良仲間集団への忠誠の圧力に押しつぶされようとしており、また巧妙な商業広告の影響と、文化集団の倫理のたえざる変化に直面しているために、自分自身の主体的な、責任のある選択のための基礎を形成する機会にあまり恵まれないままに、成人社会へ入っていくことになるのである。

しかし、このような人格的基礎は、健全な社会の創造と、児童生徒の成人社会への仲間入りのためには欠くことのできないものである。東洋と西洋における仏陀、孔子、またソクラテスやキリストのような偉大な人類の教師たちは、「人間が真実の自己を犠牲にしてまで、完全な世界を獲得するために、何をしようとしたのか」という問題に、かれらなりの解答を示したのである。

(四) 死と靈魂不滅——死は終りであるのか——

死はすべてのものの終りであるのかという問題は、一般にはあまり取り上げられていない。しかし靈魂不滅の信仰は、宗教の根本にかかわる重大な問題であり、現代の青少年にとっても少なからざる関心が寄せられているのである。児童生徒が自分自身の生命を、たんに自分一個の存在としてとらえるような時には、そこには責任ある主体としての自分自身の自覚は生まれてはこないであろう。現在の自分自身の生命の中に、過去の祖先の血脈を偲び、未来の子孫のあり方にまで遠く想到する時にはじめて、靈魂の不滅、自己の肉体の来世における再生の意味を自覚することができようになるのではないか。たんに自分自身だけの一代限りというような考え方や態度では、教育とか福祉というような営みの本質的な意味は、とうてい把握できないのではないだろうか。仏教における禪の祖師達磨の教えなどは、知性のみをあらゆる知識の基準としている現代人の自己満足を粉碎するにちがいないのである。

(四) 科学と神——科学は神を打ち破ったのか——

この問題は、科学的精神の態度を堅持し、また現代科学の発見の成果に関心を持っている、すべての文明国の青少年

年から深い関心を寄せられている。道德教育を担当する教師は、宗教と科学の関係についての問題、例えば、(一)神は存在するか、(二)宇宙における創造過程の証拠は存在するかなどについて論究するための洞察力と背景を持たなければならぬ。

最近の生化学の分野では、人間の遺伝のメカニズムの研究が進んでいるが、生命の起源や遺伝子の操作は、「神の尊厳」を侵すものではないかという批判もある。それに対して、転移リボ核酸の全合成に世界で初めて成功した大阪大学池原森男教授は、「私の研究したものは、生命の神秘に比べれば、まだほんの序の口。研究すればするほど自然の偉大さに圧倒される。その意味で、私は無神論者にはならない」と述べておられる。

わたくしたちは、世界の起源の神話を通じて伝えられている象徴的な真理と、実験によって検証される科学的な真理との相違を十分に理解していなければならない。わたくしたちが創造的な精神との接触によって得られる、あらゆる宗教上の偉大な仮説は、現代科学の光に照らして検証することができるのである。したがって、青少年の心を、た

んに外面的な世界の研究にのみ集中する科学の研究の限界に気づかせたり、内面的な世界の認識や、完全なもの、神聖なもの、健康を促進する創造過程に開かせていかなければならないのである。

㊦ 想像と構想力

これは、知能指数にかからない、いわゆる開放因子といわれるもので、未知のものを探るとか、非常にかけ離れた連想をするとかいった能力であって、独創性ないしは創造力につながる能力とされている。

それゆえ、構想力は知性の言語によってではなくて、想像と象徴の言語によってしか語られないのである。この想像と象徴の言語への感受性が、人生の意味の理解のためには欠くことができないのである。周知のように禅宗は五・六世紀のころ中国に渡ってその奥義を伝えた達磨によって開かれたといわれている。しかしその道統は、釈迦の拈華が大迦葉の微笑によって感得されたとする。釈迦とその弟子大迦葉との間の、いわゆる「拈華微笑」にその端を発するものとされている。

禅は以心伝心、不立文字を標榜している宗門であるから、

これに対する理論的な説明がその本質を説明するものでないことはいうまでもない。したがって、禅宗には芸術的な形式をとった偈頌や道歌による象徴的表現が多い。それは、真っ裸の法機と法機とが激しく相撃つところの無分別の対話である。

「眼には見れども 手には取りえず 流れの月」のように、人生についての意味は、詩歌、文学、彫刻、絵画、音楽、演劇、舞踊などの豊富な文化遺産の中で発見することができるのである。わたくしたちは、このような象徴的言語に鋭敏に感応するようになればなるほど、ますますわたくしたちの魂は変転してやまない日常生活の経験に対して開かれることになるのである。創造的な想像が生き生きと活発になり、わたくしたちの魂を人間存在の想像的な源泉に接触させるのは、ただ創造的精神の育成の中でだけであり、またそれを通じてだけなのである。

四 むすびに

この小論では、児童生徒が人生の意味についての感受性を鋭敏にさせることができるような、六領域の生活経験に

ついで考察してきた。これらは児童生徒の道徳性の育成のための基礎であり、また文化的、宗教的な背景が何であっても、すべての児童生徒の道徳教育の基礎となりうるものである。

このような道徳教育は複雑な現代社会において、人間相互の調和と寛容と協力を一層促進することに寄与するであろう。それは、特定の利害関係のある社会集団への忠誠の行為と抵触するものではなくて、それらの個別的な忠誠の行為を全体としてひとまとめにして、人類全体の福祉に対する忠誠の行為たらしめるものである。

現代社会における道徳教育は、あくまでも人類全体に開かれた、普遍的な目的をもったものでなければならぬ。学校教師は、人生における意味の探究に向って、児童生徒とともに協働する責任を負っている。学校道徳教育は人間

として真に生きるに値する生活を実践することができるような価値の発見へと導いていくような知性と感受性を育成しなければならない。そのような人生の意味についての探究は、たんに目的感覚だけではなくて、創造的に生活するための精力と活力とを、児童生徒の身につけさせることになるであろう。(昭・五四・九・四稿)

参考書

- (1) Fletcher, C., Search for Meaning: A Foundation for Ethical and Religious Education, "Religious Education, Volume LXXIII, n. 6, 1978.
- (2) 村田 昇・宮脇陽三編著「現代道徳教育の研究」めいけい出版 昭和五四年
- (3) 石堂 豊・竹内義彰・宮脇陽三・村田 昇編著「現代教育原理」めいけい出版 昭和五四年
- (4) 石堂 豊監修、宮脇陽三、久下 陸他編「現代教育活動事典(改訂版)」世界書院 昭和五三年